第 9 回九州在宅医療推進フォーラム in 福岡報告

管理者代表　訪問看護ステーション清雅苑　　木村浩美

日　時　　平成 30 年 11 月 3 日（土）～11 月 4 日（日）
場　所　　なみきスクエア
参加者数：述べ 1000人

＊3 日

＜　シンポジウム　＞　「認知症フレンドリーなまちづくりに向けて語ろう」

1.「認知症と共に生きる」　丹野智文　（認知症の人と家族の会　宮城県支部おれんじドア代表）

自動車販売営業の仕事をしていたが、お客様や同僚の顔や名前が分からなくなり、39 歳の時に若年性アルツハイマー型認知症と診断される。「認知症=終わり」と感じ落ち込んだ。
その後認知症当事者との出会いにより 10 年たっても元気でいられることを知って、「共に生きる」に変化した。薬も必要だが、環境が一番大事で、職場・家族・友人等と相談し出来ないことをサポートしてもらうことで笑顔で過ごせている。
行政等の施作は、中重度の認知症対策が多い。診断から初期症状で苦しんでいるときにこそ支えが必要である。周囲の理解と協力を期待する。

2.「気が付けば、MCI」　高橋英二　（デイサービス春の音代表）

頭痛が激しく手の腫れを感じ受診し、軽度認知障害（MCI）と診断される。52 歳で認知症？？
自分がこれからどうなるのか怖くて不眠となる。妻の支えで、仕事を辞め若年性認知症対応のデイサービスを立ち上げる。自分自身も職員として動きながら、元気になることを目標とした。
スポーツ・ウォーキング・書道手芸・料理・など利用者の個性が発揮できるプログラムを工夫し、洗車・オイル交換、公園や店舗の草取り清掃など地域の方とも交流し活動している。
出来ないことも増えているが、目標をたててどうにもならないことはあまり気にせず流れに身をゆだねる生き方をしている。大事なのは、「自分自身の心の持ち様」「居場所がある」「早期受診」です。

3.「認知症フレンドリーシティ・プロジェクト」について～認知症にやさしいまちを目指して

笠井浩一　（福岡市高齢社会部認知症支援課）

福岡市は、人口 157 万人で「住みやすい」の意見も多く、元気な街、住みやすい街として高い評価がある。ただ、2017 年 65 歳以上が 21%を超え、100 歳まで生きれることが特別ではないこととし、「福岡　100」「オール福岡」を推進している。認知症だけではなく、単身者が多くなることも加えた対策として、地域で安心して暮らせるまちづくりを目指し、「ユマニチュード」の普及・拡大に取り組んでいる。児童・生徒向けのプログラムを開発し普及していく。徘徊では、捜索システムを開発中（コンパクトデバイス）、目でわかる環境づくり（色や形を工夫した標識）

＊4 日

＜特別講演　1＞

「成熟市民社会オランダに学ぶ」～福祉における自立的選択と自立的当事者意識を育む教育

リヒテルズ直子　（オランダ教育・社会事情研究家）

・ビュールトゾルグ　「近隣ケア」 クライアントが選択する生き方と自立を尊重し、現場で働く専門職員とのコミュニケーションを充実させた形の在宅看護である。これには、オランダの合議型デ

モクラシーの背景がある。上下の関係ではなく、平等の立場から議論を重ねる手法。教育においても、教員と生徒は意思を伝え、選択を行う仕組みである。「先生は、こどもの声・話を聞く」

対話～仕事～遊び～催し・・・学校で自立・社会参加・当事者意識を教える

更に、近年はヘルシー・スクール・プログラムという名で地域の保健所が関与し、子供と教員が一緒の学校共同体とみなし、学校ぐるみの健康化のプロジェクトが進んでいる。

＜特別講演　2＞

「当事者抜きの医療にならないために～エンド・オブ・ライフ・ケアの現状に焦点を当てて」

浜渦辰二　（大阪大学文学部臨床哲学学研究室名誉教授）

医療においてもインフォームド・コンセントの説明と同意が導入され、患者の権利や自己決定権が主張されるようになった。終末期医療（エンド・オブ・ライフ・ケア）においては、無視されがちな患者の意思を尊重することが大切とされた。しかし、「リビング・ウィル」や「事前指示書」はいざという場面で混乱を引き起こしたり、後々しこりを残したりとうまくいかないまま普及に至っていない。2018.3 月厚生労働省は、ACP（人生の最終段階の医療・ケアについて、本人が家族等や医療・ケアチームと事前に繰り返し話し合うプロセス）の重要性を明記した。

＜シンポジウム　九州各地の取り組み＞

1.沖縄　患者、家族、行政、地域とともに育む地域密着型サービスを目指して
～離島の看護小規模多機能サービスの活動紹介

2.大分　「きつき版　地域包括ケアシステム」の構築を目指して
～みんなが活躍できる　地域主体のまちづくり

3.佐賀　だいでんケアネットワークのこころみ～いつでも・どこでも・誰でも自分らしさと思いやりを感じられる町づくりへの貢献

4.長崎　島原流　地域包括ケアシステムの深化
～さりげない見守りで地域をつなぐ

5.鹿児島　若年末期がん患者に対する療養支援事業
～40 歳未満の末期がん患者に訪問介護・訪問入浴・福祉用具貸与・福祉用具購入を支援する事業で、本人 1 割、市町村・県で 4.5 割づつ負担

6.宮崎　宮崎市版エンディングノート「私の想いをつなぐノート」の先進的取り組み
～「人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会」報告をふくめて

7.熊本　人生の最終段階に受けたい医療に向き合うきっかけづくり
～メッセージノート作成に関わった関係者の想いと作成秘話

8.福岡　「在宅ホスピスフェスタ」における行政と民間の協働